令和5年度　S特選コース

第2回　入学試験問題　（2月2日　午後）

国　語　（50分）

注　意

1　この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
2　問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
3　答えはすべて解答用紙に記入すること。
4　**字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「　」（　）などの記号を含んだ字数として解答すること。**
5　印刷がわからない場合は申し出ること。
6　試験終了の合図でやめること。

東京都市大学等々力中学校

受験番号		氏名	

一　次の――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

1、夜になったので行灯に火をともす。
2、納戸に物をしまう。
3、彼は昔からの知己だ。
4、人に雑言を言わないようにする。
5、病気の母を労る。
6、ヨキン口座が底をついた。
7、重いものを持つと体にフカがかかる。
8、被告人にハンケツを言いわたす。
9、重要なものがケツラクしている。
10、誕生日をイワう。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「僕」（松岡清澄（きよすみ））は高校一年生で、一歳のときに両親が離婚しており、現在は祖母、母、姉との四人暮らしである。幼いころから手芸に魅力（みりょく）を感じていた「僕」は、ひょんなことから、結婚をひかえた姉のウエディングドレスを手がけることになった。

入学式から半月以上過ぎた。僕は教卓の近くの、机みっつ分の島にいる。宮多を中心とする、五人組のグループだ。

宮多たちは、にゃんこなんとかという僕の知らないスマホゲームの話で盛り上がっている。猫のキャラクターがたくさん出てきて戦うのだという。ゲームをする習慣がないから、意味がよくわからない。さっきからぜんぜん会話に入れない。課金とかログインボーナスという単語が飛び交っている。もう、［A］すら打てなくなってきた。

祖母の顔を思い出して、懸命（けんめい）に話についていこうとした。だって友だちがいないのは、よくないことなのだ。家族に心配されるようなことなの

だから。

「なあ、松岡くんは」

宮多の話す声が、途中で聞こえなくなった。ふいに高杉くるみが視界に入ったから。

①世界地図なら、砂粒ほどのサイズで描かれる孤島。そこに彼女はいた。箸でつまんだたまごやきを口に運んでいる。唇の両端がきゅっと持ち上がった。虚勢を張るわけでもなく、［Ⅰ］するでもなく、たまごやきを味わっている。②その顔を見た瞬間「ごめん」と口走っていた。

「え」

「ごめん。俺、見たい本あるから席に戻るわ」

ぽかんと口を開ける宮多たちに、背を向ける。

図書室で借りた、世界各国の民族衣装に施された刺繍を集めた本を開く。宮多たちがこの本に興味を示すとは到底思えない。わかってもらえるわけがない。ほんとうは『明治の刺繍絵画名品集』というぶあつい図録がよかった。残念ながらそちらは貸出禁止になっていたのだ。どのように糸を重ねてあるか、食い入るように眺める。ここはこうなって、こうなってて。勝手に指が動く。

ふと顔を上げると、近くにいた数名がこっちを見ていた。男女混合の四人グループのうちのひとりが僕の手つきを真似て、くすくす笑っている。

「なに？」

自分で思っていたより、大きな声が出た。他の島の生徒たちが気づいて、こちらに注目しているのがわかった。宮多たちも。でももう、あとには引けない。

「なあ、なんか用？」

まさか話しかけられるとは思っていなかったのか、ひとりがぎょっとしたように目を見開く。その隣の男子が「は？　なんなん」と頬をひきつらせた。

「いや、なんなん？　そっちこそ」

べつに。なあ。うん。彼らは［Ⅱ］と言い合い、視線を逸らす。教室に、ざわめきが戻る。遠くで交わされるひそやかなささやきや笑い声が、耳たぶをちりっと掠めた。

その日の放課後、「僕」はくるみに声をかけられ、一緒に帰ることになる。

「あんまり気にせんほうがええよ。山田くんたちのことは」

「山田って誰？」
僕の手つきを真似て笑っていたのが山田某（なにがし）らしい。
「私らと同じ中学やったで」
「覚えてない」
個性は大事、というようなことを人はよく言うが、学校以上に「個性を尊重すること、伸ばすこと」に向いていない場所は、たぶんない。柴犬の群れに交じったナポリタン・マスティフ（注1）。あるいはポメラニアン（注2）。集団の中でもてはやされる個性なんて、せいぜいその程度のものだ。③犬の集団にアヒルが入ってきたら、あつかいに困る。
アヒルはアヒルの群れに交じれば見分けがつかなくなる。その程度のめずらしさであっても、学校ではもてあまされる。浮く。くすくす笑いながら仕草を真似される。
「だいじょうぶ。慣れてるし」
けど、お気遣いありがとう。そう言って隣を見たら、くるみはいなかった。数メートル後方でしゃがんでいる。灰色の石をつまみあげて、Ⅲ と観察しはじめた。
「なにしてんの？」
「うん、石」
うん、石。ぜんぜん答えになってない。入学式の日に「石が好き」だと言っていたことはもちろんちゃんと覚えていたが、まさか道端の石を拾っているとは思わなかった。
「いつも石拾ってんの？　帰る時に」
「いつもではないよ。だいたい土日にさがしにいく。河原とか、山に」
「土日に？　わざわざ？」
「やすりで磨（みが）くの。つるつるのぴかぴかになるまで」
放課後の時間はすべて石の研磨（けんま）にあてているという。ほんまにきれいになんねんで、と言う頬がかすかに上気している。
ポケットから取り出して見せられた石は三角のおにぎりのような形状だった。たしかによく磨かれている。触ってもええよ、と言われて、手を伸ばした。指先で、しばらくすべすべとした感触を楽しむ。
「さっき拾った石も磨くの？」
くるみはすこし考えて、これはたぶん磨かへん、と答えた。

「磨かれたくない石もあるから。つるつるのぴかぴかになりたくないってこの石が言うてる」
石には石の意思がある。駄洒落のようなことを真顔で言うが、意味がわからない。
「石の意思、わかんの？」
「わかりたい、といつも思ってる。それに、ぴかぴかしてないときれいやないってわけでもないやんか。ごつごつのざらざらの石のきれいさってあるから。そこは尊重してやらんとな」
じゃあね。その挨拶があまりに唐突でそっけなかったので、怒ったのかと一瞬焦った。
「キヨくん、まっすぐやろ。私、こっちやから」
川沿いの道を一歩踏み出してから振り返った。Ⅳと前進していくくるみの後ろ姿は、巨大なリュックが移動しているように見えた。
石を磨くのが楽しいという話も、石の意思という話も、よくわからなかった。わからなくて、おもしろい。わからないことに触れるということ。似たもの同士で「わかるわかる」と言い合うより、そのほうが楽しい。
ポケットの中でスマートフォンが鳴って、宮多からのメッセージが表示された。
「昼、なんか怒ってた？　もしや俺あかんこと言うた？」
違う。声に出して言いそうになる。宮多はなにも悪いことをしていない。ただ僕があの時、気づいてしまっただけだ。自分が楽しいふりをしていることに。
いつも、ひとりだった。
教科書を忘れた時に気軽に借りる相手がいないのは、心もとない。ひとりでぽつんと弁当を食べるのは、わびしい。でもさびしさをごまかすために、自分の好きなことを好きではないふりをするのは、好きではないことを好きなふりをするのは、もっともっとさびしい。
好きなものを追い求めることは、楽しいと同時にとても苦しい。その苦しさに耐える覚悟が、僕にはあるのか。
文字を入力する指がひどく震える。
「ちゃうねん。ほんまに本読みたかっただけ。刺繍の本」
ポケットからハンカチを取り出した。祖母に褒められた猫の刺繍を撮影して送った。すぐに既読の通知がつく。
「こうやって刺繍するのが趣味で、ゲームとかほんまはぜんぜん興味なくて、自分の席に戻りたかった。ごめん」
ポケットにスマートフォンをつっこんだ。数歩歩いたところで、またスマートフォンが鳴った。
「え、めっちゃうまいやん。松岡くんすごいな」
そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ。

わかってもらえるわけがない。どうして勝手にそう思いこんでいたのだろう。

今まで出会ってきた人間が、みんなそうだったから。だとしても、宮多は彼らではないのに。

いつのまにか、また靴紐がほどけていた。しゃがんだ瞬間、川で魚がぱしゃんと跳ねた。波紋が幾重にも広がる。④太陽の光を受けた川の水面が風で波打つ。まぶしさに目の奥が痛くなって、じんわりと涙が滲む。

きらめくもの。揺らめくもの。目に見えていても、かたちのないものには触れられない。すくいとって保管することはできない。太陽が翳ればたちまち消え失せる。だからこそ美しいのだとわかっていても、願う。布の上で、あれを再現できたらいい。そうすれば指で触れてたしかめられる。身にまとうことだって。そういうドレスをつくりたい。着てほしい。すべてのものを「無理」と遠ざける姉にこそ。きらめくもの。揺らめくもの。どうせ触れられないのだから、なんてあきらめる必要などない。無理なんかじゃないから、ぜったい。

どんな布を、どんなかたちに裁断して、どんな装飾をほどこせばいいのか。それを考えはじめたら、いてもたってもいられなくなる。

それから、明日。明日、学校に行ったら、宮多に例のにゃんこなんとかというゲームのことを、教えてもらおう。好きじゃないものを好きなふりをする必要はない。でも僕はまだ宮多たちのことをよく知らない。知ろうともしていなかった。

靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる。

（寺地 はるな「水を縫う」より）

（注1）ナポリタン・マスティフ…… 犬の種類。大型犬で、番犬や警察犬になることが多い。

（注2）ポメラニアン…… 犬の種類。小型犬で、多様な毛色を持つ種となっている。

問 一、A にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、舌鼓　イ、相槌　ウ、手　エ、ひざ

問二、Ⅰ～Ⅳにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、もごもご　イ、ずんずん　ウ、おどおど　エ、しげしげ

問三、――線①「世界地図なら、砂粒ほどのサイズで描かれる孤島」とありますが、この表現の説明として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、くるみが、クラスの中で、どの集団にも所属していないことを象徴的に表現している。
イ、くるみが、クラスの中で、どの集団とも接点を持っていないことを象徴的に表現している。
ウ、くるみが、クラスの中で、取るに足らないちっぽけな存在であることを象徴的に表現している。
エ、くるみが、クラスの中で、一人でいても全く気にしない性質であることを象徴的に表現している。

問四、――線②「その顔を見た瞬間『ごめん』と口走っていた」とありますが、ここでの「僕」はどのような様子でしたか。そのことを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、それぞれ指定された字数で答えなさい。ただし、1・2は文章中からそれぞれ抜き出して答え、3は考えて答えること。

一人で黙々とお昼ご飯を食べるくるみを見て、1、九字 ために 2、十字 自分を、はっきりと認識してしまい、3、十字以内 様子。

問五、――線③「犬の集団にアヒルが入ってきたら、あつかいに困る」とありますが、これはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、見るからに別のものが入りこんだら、集団と完全に相容(あい)れない存在になってしまうということ。
イ、見るからに別のものが入りこんだら、周囲が気をつかって、心底疲れ切ってしまうということ。
ウ、明らかに異質なものが加わったら、学校は大きな圧力をかけて排除せざるをえないということ。
エ、明らかに異質なものが加わったら、集団の秩序(ちつじょ)に乱れが生じ、ばらばらになってしまうということ。

問六、――線④「太陽の光を受けた川の水面が風で波打つ」の主語を、この文から探し、抜き出して答えなさい。

問七、「僕」に関する説明として適当なものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア、読書をすることが何よりも好きで、友だちと話すよりも刺繍の本が気になってしまう。
イ、刺繍をすることが好きな自分を、内心引け目に感じていて、周囲に遠慮してしまう。
ウ、中学のときから孤独には慣れていて、ひとりで過ごすことに何の違和感も抱いていない。
エ、くるみの温かいはげましと包容力で、高校生活に少し楽しみを見出せそうになっている。
オ、クラスメイトとのやり取りを通して、知らないことを知る楽しみが、少し分かり始めてきた。
カ、今までは、自分を理解してもらえないと思いこんで、うわべだけの交友関係を育んできた。

問八、この作品について、クラスの生徒が思い思いに意見を出し合いました。本文の内容に合っていないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、A子さん――高校に入って親しく言葉を交わすようになったくるみは、ある意味、「僕」の羅針盤（らしんばん）みたいな存在と言えるかもね。くるみの、あくまで自然体で自分をつらぬく姿に、「僕」は背中を押され、いろんな気づきをしていくのよ。

イ、B男さん――そのくるみの様子は「石の意思」に象徴されているんだよな。そこから、中学までの「僕」自身、まず周囲のことを理解しようとしていなかったことに、初めて気づいたんだよ。

ウ、C子さん――それってすごい心の変化よね。宮多に、自分の本心をやっとの思いで打ち明けたのも、一歩踏み出そうという勇気ある行動と言えるんじゃないかしら。

エ、D男さん――でも、くるみの、ある意味、心を閉ざしてうちとけようとしない、かたくななところが、「石の意思」に投影されてるとも言えるね。そうなると結局、自分本位なだけともとれるんじゃないかな。

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

誰でもおそらく中学生、高校生の頃に「自分」を発見する。と同時に、その反対側にある「世界」と出会う。自分を包み込んでいるもっと大きな世界。自分がその中で生きている社会環境としての世界。［A］人によっては自然環境としての世界かもしれない。

いずれにせよ、中学生、高校生の頃に、「自分」のまわりには「世界」というものがあるのだ、という感触を初めて本当に知ることになるのだと思う。それまでは生まれ育った「家」に守られていて、自分が無防備な状態で世界に直面しているという実感はない。

①自分を発見すること。世界と出会うこと。この二つは表裏一体の出来事だ。世界と出会うことによって改めて自分を発見しなおす、と言ってもよい。

「世界と出会う」とは、もう少し詳しく言うと「自分にとって手も足も出ないような、人間のスケールを超えた、ある大きな力と出会う」ことだ。そういう経験がきっと皆さんにもあると思う。まだないという人も、近いうちにきっとある。「大きな力」とは何なのか、人によって違うだろうが、それに出会う瞬間は必ず訪れるにちがいない。

［B］、自分の狭い殻に閉じこもっていては、そういう機会が訪れても気づくことができない。［C］、自分をバリアで囲い込むのではなく、何か大きな力と出会う機会に向けて、常に自分を開いていてほしい。

「自分」はつねに「世界」のさまざまな波打ち際と接している。その波打ち際はいつも近くにある。それに向けて自分を開いておく。開く勇気を持つ。

たしかに、大きな津波が来たらどうするのか。逃げられないではないか。とすると②「世界の波打ち際に向けて自分を開く」のは一見、怖いこと、危険なことのように思えるかもしれない。

でも、そうではない。

東日本大震災の大津波では、防波堤をア人工的に築いても役にたたないことがわかった。でもそれはコンクリートの防波堤を超える高さと威力の津波が来たからで、もっと高くて強固な防波堤を築くべきだ、というイ判断がいまだにある。けれども、③本当にそうだろうか？　そんなウ教訓でよいのだろうか？

私たちは海という巨大な謎の世界と、自分たちが住んでいる見知った街を、防波堤というエ境界で分断してしまった。［D］、バリアを築いて自分たちを囲い込んでしまった。そう考えてみてはどうだろう。

かつて海辺で暮らしていた人々は、海を通じて世界と対面していた。海の色、潮の匂い、波の音や高さ。これらはすべて情報のアーカイブ(注1)だっ

た。それを読み解けば、天候がどんなふうに変化するか、いつ、どのくらいの大きさの波が来るかがわかった。つまり海という巨大な謎の世界からのシグナルをキャッチできた。それは長い時間のなかで知らず知らずに身についた知恵だ。

ところが、海と人との間に巨大なコンクリートの壁を築いたらどうなるか。そうした自然がもたらす情報は遮断されてしまう。人間が海と対話することができなくなってしまう。天候の変化も、津波の危険性も察知できない。やがて海からのシグナルをキャッチする感受性は失われていく。人は生きるための大切な知恵の一つを捨ててしまったのだ。

だから皆さんに言いたい。自分を開くのは決して無防備な仕草ではない。外の世界から発信されているさまざまな信号や情報を全身で受け止める。それは、自然に向けても社会に向けても自己を開放し、対話することなのだ。その行動を恐れてはいけない。

僕が皆さんと同世代の頃、どんなふうに世界と出会い、結果として自分を再発見する糸口をつかんだか。それについて思いつくままに話したい。そこから皆さんが、自分自身の現在と未来に照らし合わせて、何かヒントになることを受け取ってくれたら、とても嬉しい。

小さい頃に僕が初めて出会った世界は昆虫の世界だった。いまや虫は嫌われ者だけれど、一歩外に出れば豊かで神秘的な虫の世界が広がっていた。④虫たちもまた、世界がわれわれに対して送り込んでいる信号の一つだ。僕はその信号に関心をもち、虫を採ることで外の世界に飛びだし、対話することを学んだ。卵や幼虫を採集して飼育もした。そうやってひたすら昆虫のことを深く知ろうとした。

ファーブルの『昆虫記』は知っていると思う。僕も皆さんくらいの頃に虫を通じてジャン＝アンリ・ファーブル（一八二三～一九一五）の本に出会った。ファーブルはおもしろい人で、いうなれば権威に対する反逆者だった。

当時のヨーロッパはチャールズ・ダーウィン（一八〇九～一八八二）の進化論が権威を持ち始めていた時期だ。生物が自然環境との関わりの中で共通の祖先から長い時間をかけて変化してきたことを明らかにした進化論は、学問的には一つの大発見だった。

ところがファーブルは『昆虫記』で「進化論にお灸を据える」というタイトルの一章を書いている。ダーウィンの進化論は［　I　］にすぎないのではないか。それがファーブルの意見だ。

『昆虫記』にあるように、ファーブルは南フランスの野山で小さな昆虫たちの生態を徹底的に観察した。

例えばハチの仲間でも種類が違えば食べているものも全く違う。昆虫たちが自然の中で生きている多種多様な姿をありのまま、事細かに調べ続けていたファーブルにとって、ダーウィンの学説はあまりにも抽象的な机上の空論に見えたのだろう。ファーブルはかなり本質的にダーウィンを批判している。

結局、今に至るも学問としてはダーウィンの進化論は生物学の正統であり続け、ファーブルは自然観察家としては有名だが、学問的にはあまり評価されていない。それでよいのだろうか？　ファーブルを学者として再評価するのは興味深いテーマだ。皆さんの中からそんなテーマに挑戦する人が出てくることを期待したい。

しかもファーブルは生物学だけの人ではない。詩人であり、作曲家でもあった。それから、南フランスのオック語という古い少数言語が消滅しかけているのを心配して、保護運動にも乗り出した。九二歳まで長生きした人だから、いろんなことをやっている。生涯を通じてアカデミズム（大学など学問の権威的な世界）の外にいた人で、反 Ⅱ 精神、批判精神が非常に強い。

今から振り返ると、僕は虫の世界を通じてファーブルのそうした存在に惹かれていたような気がする。僕自身ものちに、学問の形式的な枠組みからどんどん離れていってしまった。自分の中では一貫した情熱と探求心があるのだけれど、外からみると僕のやり方は決められた枠からはみだし、公式的な学問の道から外れてどこか遠くへ放浪していったように見えるらしい。⑤そうした動き方には、もしかしたら少年期に出会ったファーブルの影響が強いのかもしれない。

小学生の頃から僕は、捕虫網や飼育瓶などを買うために、渋谷の宮益坂の上にあった「志賀昆虫」という店によく通っていた。日本で最初に昆虫の採集道具や飼育道具を独自に開発・販売した志賀昆虫普及社の志賀夘助（一九〇三～二〇〇七）は、日本の(注2)アマチュア昆虫学の普及に決定的に重要な役割を果たした。彼も一〇四歳とファーブル以上に長命だった。

昆虫学は好奇心が旺盛なアマチュアによって支えられている。新種を発見して昆虫学の展開や向上に貢献している大多数の人は大学の学者ではなくアマチュアの昆虫採集家だ。その中には子どももいる。これは天文学も同じで、新しい星を発見する人の中には多くのアマチュアの天文家がいる。

毎日毎日、空を見上げて天体観測している人。毎日毎日、野山に出て昆虫を探している人。学問はアカデミズムの専門家だけで成立するのではなく、そうした民間の愛好家やアマチュア学者によっても支えられている。学問はわれわれの日常世界と無縁ではない。⑥アカデミズムの外にも広大な学問の世界はあるのだ。

（今福 龍太「学問の殻を破る――世界に向けて自己を開放すること」より）

（注1）「アーカイブ」……書庫・保存記録。

（注2）「アマチュア」……芸術・学問・スポーツなどを、職業ではなく、趣味や余技として行う人。素人、愛好家とも言う。

問一、[A]～[D]にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、たとえば　　イ、だから　　ウ、しかし　　エ、あるいは　　オ、つまり　　カ、むしろ

問二、――線①「自分を発見すること。世界と出会うこと。この二つは表裏一体の出来事だ」とありますが、そのように言えるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、生まれ育った「家」に守られているうちは怖いことや危険なことには出会わないが、自分を包み込んでいるもっと大きな世界を知ることによって初めて自分の無防備さに気づくから。

イ、自分の狭い殻に閉じこもっている間は世界の多様な情報は届かないが、自分の可能性を見つめ直すことによって人間のスケールを超えた世界の大きさに気づくことができるから。

ウ、自分にとって手も足も出ないような大きな力と出会うことが世界との出会いであり、そのような世界からの多様な情報を受信するうちに生きるための大切な知恵を手に入れられるから。

エ、自分を開放して外の世界から発信されているさまざまな信号や情報を受け止めることは世界と自分との対話であり、そのような対話を通して自分を再発見することにつながるから。

問三、――線②「『世界の波打ち際に向けて自分を開く』のは一見、怖いこと、危険なことのように思えるかもしれない」とありますが、なぜ「怖いこと、危険なことのように思える」のですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から二十字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

[　　二十字以内　　]と感じられるから。

問四、═線ア「人工」・イ「判断」・ウ「教訓」・エ「境界」のうち、他と構成が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問五、──線③「本当にそうだろうか」とありますが、筆者がこのように述べるのはなぜですか。文章中の言葉を使って、三十五字以上四十五字以内でわかりやすく説明しなさい。

問六、──線④「虫たちもまた、世界がわれわれに対して送り込んでいる信号の一つだ」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、小さな虫たちも、人間にとって大きな脅威となることがあるということ。
イ、虫の世界にも、そこから人間が学べるような情報が豊富にあるということ。
ウ、虫を観察することで、自然環境の変化をキャッチする感受性が育つということ。
エ、いまや虫は嫌われ者だが、人間はもっと虫と密接な関係を築くべきだということ。

問七、［　Ⅰ　］にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、伝統的な世界観と背反する危険な思想
イ、自然の実態とかけ離れた観念的な理論
ウ、生物の多様性を無視した人間中心の思考
エ、大学の権威主義に毒された公式的な学問

問八、［　Ⅱ　］には体の一部を示す言葉が入ります。その言葉を漢字一字で答えなさい。

問九、――線⑤「そうした動き方には、もしかしたら少年期に出会ったファーブルの影響が強いのかもしれない」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、公式的な学問の枠組みにとらわれない筆者の研究スタイルは、学問の権威的な世界を外部から批判的に眺めたファーブルの姿勢と通じるものがあるかもしれないということ。

イ、いつもどこか遠くへ放浪しているように見える筆者の生き方は、野山で小さな昆虫たちの生態を徹底的に観察したファーブルの生き方を無意識になぞっているのかもしれないということ。

ウ、学問の形式的な枠組みからどんどん離れていってしまう筆者の性向は、生物学者でありながらその肩書だけに収まらずに多種多様な活動に手を出したファーブルとそっくりであるということ。

エ、正統的な学問の道を目指す筆者が他人の目には決められた枠からはみだしているように見えるのは、学問的には正統ではないファーブルからの影響を少年時代に強く受けたことに原因があるということ。

問十、――線⑥「アカデミズムの外にも広大な学問の世界はあるのだ」とありますが、ここで筆者はどのようなことを述べようとしていますか。その説明として適当でないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、権威で守られた学問領域だけが探求すべき世界ではなく、より広い視野を持つべきだということ。

イ、われわれにとって身近な日常世界の中にも、深く学ぶべき多くの情報が存在しているということ。

ウ、大学以外の教育機関にも正統的な学問は存在していて、その種類や内容は多種多様だということ。

エ、自分が興味を持った世界について深く知ることは、何であれ自分の再発見につながるということ。

四　次の資料を見て、あとの問いに答えなさい。

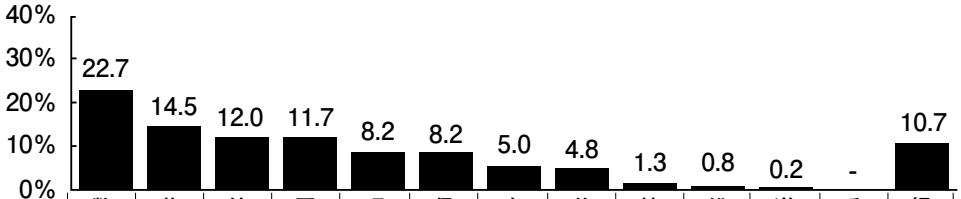
資料A　好きな教科・嫌いな教科

学年別にみると、「　①　」は学年が上がるほど、“好き”が増えている。

男女別で見た場合、男子全体では31.3％が「　②　」を“好き”と答えており、2位の「社会」（14.0％）以下を引き離して断トツである（女子は14.0％が“好き”と回答している）。一方「　②　」を“嫌い”と答えた女子は32.7％にのぼる。2位の「社会」が13.7％であることを見ても、「　②　」の女子人気の低さは群を抜いている（男子は16.3％が“嫌い”と回答している）。また「　③　」は女子の好きな教科1位（17.0％）だが、男子の嫌いな教科1位（22.3％）でもあり、男女間での差異が大きく現れる結果となった。

（出典:学研教育総合研究所　中学生白書Web版　2020年8月調査より作成）

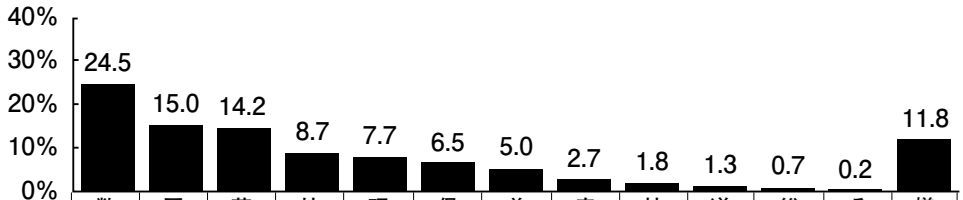
資料B　好きな教科



		人	数学	英語	社会	国語	理科	保健・体育	音楽	美術	技術・家庭	総合的な学習	道徳	その他	好きな教科はない
全体		600	22.7	14.5	12.0	11.7	8.2	8.2	5.0	4.8	1.3	0.8	0.2	-	10.7
性別	男子	300	31.3	12.3	14.0	6.3	9.3	9.0	2.0	3.0	1.3	0.7	0.3	-	10.3
	女子	300	14.0	16.7	10.0	17.0	7.0	7.3	8.0	6.7	1.3	1.0	-	-	11.0
性学年別	男子　中学1年生	100	32.0	9.0	16.0	8.0	8.0	11.0	2.0	5.0	-	1.0	-	-	8.0
	男子　中学2年生	100	33.0	13.0	13.0	6.0	9.0	8.0	2.0	-	4.0	1.0	-	-	11.0
	男子　中学3年生	100	29.0	15.0	13.0	5.0	11.0	8.0	2.0	4.0	-	-	1.0	-	12.0
	女子　中学1年生	100	10.0	16.0	10.0	18.0	12.0	6.0	8.0	7.0	1.0	-	-	-	12.0
	女子　中学2年生	100	15.0	15.0	10.0	15.0	5.0	9.0	8.0	9.0	2.0	1.0	-	-	11.0
	女子　中学3年生	100	17.0	19.0	10.0	18.0	4.0	7.0	8.0	4.0	1.0	2.0	-	-	10.0
学年別	中学1年生	200	21.0	12.5	13.0	13.0	10.0	8.5	5.0	6.0	0.5	0.5	-	-	10.0
	中学2年生	200	24.0	14.0	11.5	10.5	7.0	8.5	5.0	4.5	3.0	1.0	-	-	11.0
	中学3年生	200	23.0	17.0	11.5	11.5	7.5	7.5	5.0	4.0	0.5	1.0	0.5	-	11.0

※全体の値を基準に降順並び替え © 学研教育総合研究所（Gakken）より作成

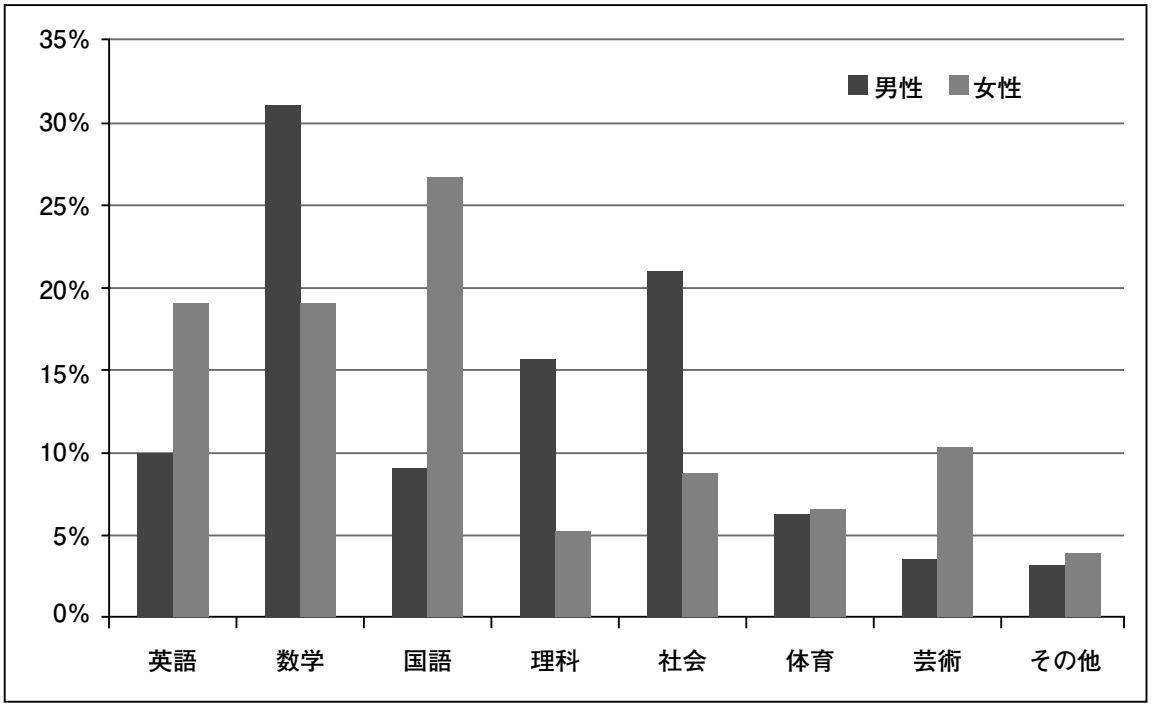
資料C　嫌いな教科



		人	数学	国語	英語	社会	理科	保健・体育	美術	音楽	技術・家庭	道徳	総合的な学習	その他	嫌いな教科はない
全体		600	24.5	15.0	14.2	8.7	7.7	6.5	5.0	2.7	1.8	1.3	0.7	0.2	11.8
性別	男子	300	16.3	22.3	18.7	3.7	7.0	5.0	8.0	4.7	1.3	2.3	0.3	0.3	10.0
	女子	300	32.7	7.7	9.7	13.7	8.3	8.0	2.0	0.7	2.3	0.3	1.0	-	13.7
性学年別	男子　中学１年生	100	18.0	25.0	20.0	4.0	7.0	3.0	6.0	4.0	--	3.0	-	-	10.0
	男子　中学２年生	100	12.0	18.0	19.0	3.0	11.0	7.0	10.0	6.0	1.0	2.0	1.0	-	10.0
	男子　中学３年生	100	19.0	24.0	17.0	4.0	3.0	5.0	8.0	4.0	3.0	2.0	-	1.0	10.0
	女子　中学１年生	100	33.0	9.0	9.0	13.0	7.0	8.0	3.0	-	3.0	-	1.0	-	14.0
	女子　中学２年生	100	32.0	8.0	11.0	10.0	10.0	4.0	1.0	2.0	3.0	-	2.0	-	17.0
	女子　中学３年生	100	33.0	6.0	9.0	18.0	8.0	12.0	2.0	-	1.0	1.0	-	-	10.0
学年別	中学１年生	200	25.5	17.0	14.5	8.5	7.0	5.5	4.5	2.0	1.5	1.5	0.5	-	12.0
	中学２年生	200	22.0	13.0	15.0	6.5	10.5	5.5	5.5	4.0	2.0	1.0	1.5	-	13.5
	中学３年生	200	26.0	15.0	13.0	11.0	5.5	8.5	5.0	2.0	2.0	1.5	-	0.5	10.0

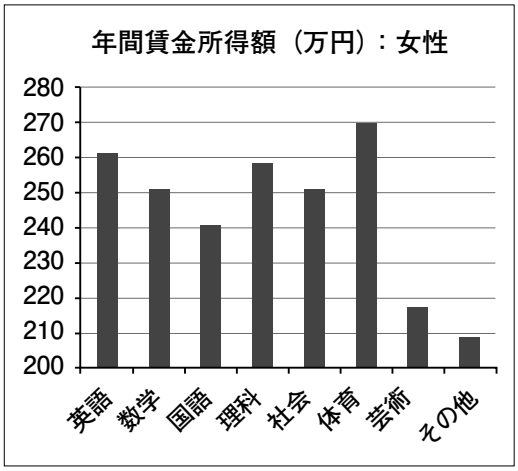
※全体の値を基準に降順並び替え © 学研教育総合研究所（Gakken）より作成

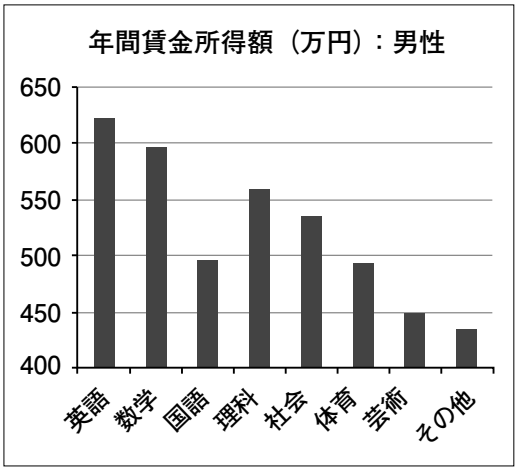
資料D　男女別得意科目の分布



（出典：内閣府経済社会総合研究所『経済分析』第198号より）

資料E　男女別得意科目と賃金





（出典：内閣府経済社会総合研究所『経済分析』第198号より）

資料F　数学が得意であることと収入の高さの関係

女性において数理を得意とする人はマイノリティ(注1)なので、企業等の社会では、数理の得意な女性が働きやすい環境を作り出すことに対応するインセンティブ(注2)に欠けている可能性があり、能力が活かされていない可能性がある。また、数理的、論理的な思考力が必要とされる分野・職階に女性が就労・昇進できていない、という可能性もある。大学で理数系へ進学する女性は少なく、もともとある数学への適性が発揮されていない可能性も高い。

（注１）マイノリティ…少数。少数派。

（注２）インセンティブ…やる気を起こさせるような刺激。動機付け。成果を上げた社員に通常の給料や手数料以外に特別に支給する報奨金など。

（出典：内閣府経済社会総合研究所『経済分析』第198号より）

資料G　女性の得意科目と賃金

□体育が得意であると週平均労働時間が 3.577 時間長くなる。

□週平均の労働時間が一時間長くなると、1.486 万円の増加をもたらす。

そうした間接的な効果を考慮すれば、年間賃金収入は 5.315 万円増加することになり、トータルでの体育の影響は、42.575 万円の増加となっている。

（出典：内閣府経済社会総合研究所『経済分析』第198号より作成）

問一、資料Aの［①］～［③］にあてはまる科目を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、国語　イ、数学　ウ、英語　エ、理科　オ、社会

問二、得意科目・好きな教科と年間賃金収入の関係の説明として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア、女子中学生が好きだと感じる教科を勉強すると、高い賃金を得られるようである。
イ、教科の好き嫌いと得られる賃金には、ほとんど相関性がみられないようである。
ウ、女性の場合、得意科目と一年間で得られる賃金の関係は、体力と労働時間の関係に表れているようである。
エ、男性は、数理的思考力が必要とされる職階に就く可能性が高いので、好きな教科が収入の高さと関連があるようである。

問三、女性が数理を勉強する動機となる可能性があるものとして適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、論理的な思考力が必要とされる職階に女性を就労させる。
イ、女性全般にインセンティブを与える機会を多くする。
ウ、数理が得意な女性がより働きやすい環境を作り出す。
エ、数理が得意な女性の能力を活かしきれる職場を作る。

用紙ヨコ　上　こちらを上にしてください

令和5年度　S特選コース（4教科型）

第2回　中学校入学試験問題　〔国語〕　解答用紙　（2月2日午後）

注意事項
・解答は解答欄の枠内に濃くはっきりと記入して下さい。
・解答欄以外の部分には何も書かないで下さい。

氏名

受験番号

⓪	⓪	⓪	⓪
①	①	①	①
②	②	②	②
③	③	③	③
④	④	④	④
⑤	⑤	⑤	⑤
⑥	⑥	⑥	⑥
⑦	⑦	⑦	⑦
⑧	⑧	⑧	⑧
⑨	⑨	⑨	⑨

評価点

〈受験生はこれより上段には記入しないこと〉

一　10　9　8　7　6　5　4　3　2　1

二　八　七　六　五　四（3　2　1）　三　二（Ⅳ　Ⅲ　Ⅱ　Ⅰ）　一

三　十　九　八　七　六　五　四　三　二　一（D　C　B　A）

四　三　二　一（③　②　①）

一

1 行灯	6 ヨキン
2 納戸	7 フカ
3 知己	8 ハンケツ
4 雑言	9 ケツラク
5 労（る）	10 イワ（う）

る　う

二

問一

問二　Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ　Ⅳ

問三

問四　1　2　3　（10　10）

問五

問六

問七

問八

三

問一　A　B　C　D

問二

問三　最初　～　最後

問四

問五　（45　〈35〉　40　30　20　10）

問六

問七

問八

問九

問十

四

問一　①　②　③

問二

問三